

るさつ 探訪

月

暦

「五日・五穀・五月病」

思えば、一九九九年（平成十一）五月号から登載した生活の詩（月毎のキャッチ・フレーズで表現した一年中の歌）を、もうちょっとふくよかにしたいと、七年ぶりの言わばパート2擬きとも言うべきことを綴ってみよう。

五日……鯉のぼり五月の五日は端午の節句であり、こどもの日



である。元氣・活発・男の子を教える。それは「屋根より高い鯉のぼり」であって欲しいという希望・期待・祈念が込められた端午（初）の午（五）の日である。文字通りの……。

なのに、地域の子どもは「うちの子・よその子・みんなの子」として、地域ぐるみで守り育てることが『現下の喫緊の課題』となり、毎日が重要なこの課題解決に取り組まなければ「子どもの命が危ない毎日」なのである。

かつては、「いつでも・どこでも・だれでも知っている子どもと大人」だったのどかな東川でも、「見つめ・見守り・見届ける」活動が必要不可欠な今のだから、しかも、うっかり声かけでもしたら、不審者通報されるのだから。余計に厄介なのである。「子どもの安全・安心活動」を積極的に進めるためにも、「防犯は日每家毎 地域毎」をモットーとして、顔見知りの大人がスクラ

ムを組まないで、「五日が何時か」になつてしまふ。

五穀……米・麦・アワ・キビ・豆の五穀豊穣は「暮らしのバロメーター」であり、自給自足のベースでもある。

なのに、出来過ぎて（過ぎたるは猶及ばざるが如し）、豊作貧乏（豊作飢饉）が取り沙汰される現状の矛盾（？）、そしてお米ばかりではない牛乳もである。田中義剛花畑牧場長（タレント）によると、「農産物、魚、牛乳も食育がないから簡単に捨てられてしまふ（中略）。子供にモノを大切にしろと言つてもよく分からないだろう。そのものの命を奪うことなく、人間のためになるものがハチミツ、果物、牛乳の三つである（後略）」

そういえば、二〇〇五年（平成十七）八月号「りのつくカタカナ語」で、日本語の「もつたいない」を世界の環境保護の合言葉にしようとする運動を広げるワンガリ・マータイさん（ノーベル平和賞受賞者、ケニア）がテレビで力説されておられたが、本当に「もつたいない」ことが沢山ある。

粟も黍も現在では米、麦、豆には及ばない生産量だろうが、一一〇

年ほど前に開拓地ひがしかわでも「白いマンマ（おコメ）を早く食べたい。」と願いながらも、イネ科の一年草である粟や黍を食べていたのである。東川産米を口にしていたの喜びを想像する限り、「勝手・贅沢・無駄遣い」では、今にきつと「罰が当たる」にちがいない。

五月病……新入社員や大学生などが五月ごろになると軽い憂うつ感や無気力などの不適応症状に悩まされる。これが五月病といわれ、得てして目的の無い入学や不本意な入社などに起因する病気だといわれる。

そもそも、「病は気から」ともいわれるが、四月からわずか一か月ばかりで五月病なんて……。とはいっても、世知辛い昨今にあつての現代病とも……。

風薫る五月、緑のそよかぜが大に囁く五月なのに、かなりの暗がりばかりとなつたようであるが、傾向をとらえたり、動向をつかんんだりしながら、方向を見定めたりする「生動の五月」でありたいと、大いに五感を働かせて爽やかな五月を過ぎなくちゃ……。

（元郷土史編集専門員
尾池隆男

人口/7,623人（前月比△45人）、男/3,647人（前月比△25人）、女/3,976人（前月比△20人）
世帯数/2,998戸（前月比△19戸）、出生/3人、死亡/9人、転入/67人、転出/106人【3月31日現在】
※住民登録の手続き上、人口増減と出生・死亡・転入・転出の増減は一致しないことがあります。

PRINTED WITH SOYINK 100 本誌の印刷には、大豆インクを使用しています。また用紙には再生紙(100%)を使用しています。